



後鳥羽上皇 篇

後鳥羽上皇の願い

後鳥羽天皇は、建久9（1198）年に皇位を土御門天皇に譲り、承久3（1221）年まで太上天皇（上皇）として、政治（院政）を行いました。承久3年には、鎌倉幕府の2代執権・北条義時に対して討伐の兵を挙げ（承久の乱）しましたが、敗北し隠岐へと流されてしまいました。この戦いで朝廷に対して武家政権が優位となり、これ以降、武家が中心となって政治を行いました。

後鳥羽上皇が関係した寺院のひとつに大野寺があります。大野寺は、真言宗室生寺派のお寺で、「室生寺の西の大門」ともいわれています。宇陀川対岸の自然岩壁に刻まれた石仏（弥勒磨崖仏）は、よく知られており、今は、しだれ桜の名所ともなっています。石仏は岩壁を彫り窪め、その面に陰線彫りで現されている高さ約11・5mの磨崖仏です。

鎌倉時代の初期、承元元（1207）年に興福寺僧 雅縁の発願、後鳥羽上皇の勅願（祈願）で石仏の造立がはじまり、宋の石工たちによって作業が進められました。この石仏は、笠置寺本尊の弥勒磨崖仏を模したものともいわれています。承元3（1209）年には、石仏の開眼供養が行われ、この時、後鳥羽上皇が当地を訪れています。開眼供養の際、後鳥羽上皇や公家たちの筆になる願文類を石仏胎内に納めたと記録されています。この頃は朝廷と鎌倉幕府の双方が政治を行っていた時期で、承久の乱が起こる少し前。どのような願いがこの石仏に込められていたのでしょうか。

